

P1-058

夜間におよぶ質の高い保育の展開と普及に向けたニーズ把握—FGIを用いて—

田中 笑子<sup>1,2</sup>、富崎 悦子<sup>3</sup>、渡辺 多恵子<sup>4</sup>、  
安梅 勅江<sup>1</sup>

<sup>1</sup>筑波大学 医学医療系

<sup>2</sup>日本学術振興会

<sup>3</sup>慶應義塾大学

<sup>4</sup>淑徳大学

【目的】

夜間におよぶ保育の質向上の普遍化に向けたシステム構築を実現するため、専門職の「なまの声」から、夜間に及ぶ質の高い保育を展開する上で欠かせない点と質の高い保育の普及に向けた方向性を明らかにすることが必要である。本研究は、質的研究により、夜間におよぶ質の高い保育の展開と普及に向けたニーズを明らかにすることを目的とした。

【方法】

平成29年10月に、夜間に及ぶ保育に携わる子育て支援専門職10名を対象としてフォーカス・グループ・インタビュー調査を実施し、得られた結果を質的に整理した。調査時間は約1時間半であり、調査項目は「夜間に及ぶ質の高い保育を展開する上で欠かせない点」「質の高い保育を普及するために何が必要か」の2点とし、倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

専門職の生の声に基づき検討した結果、『個』と『環境』の領域から下記が抽出された。『個』の領域では、「安全、安心、衛生の保証」、「遊びと教育」、「子ども自身の情緒を安定させること」、「地域性を反映した支援サービス提供」、「個別的な支援ニーズ理解」、「親子の関係性への理解と支援」、「ファミリーウェルビーイングの観点」などが語られた。『環境』の領域では、「保育実施への支援」では、夜間に及ぶ保育の特性から、「子どもが園で見せる姿への専門的支援の必要性」、や園での子どもの生活を支えるための経費や保育士負担が高まることを踏まえ、「保育の質に関する水準の維持」、「必要経費への理解」「保育士人数の増加」など、保育の実現と継続に向けた支援と仕組みの必要性に加え、社会の理解を得る必要性など「地域および社会との協働」の重要性が語られた。

【考察】

夜間におよぶ質の高い保育の展開と普及に向けたニーズを、長年夜間保育に携わる専門職のなまの声から質的に検討した結果、多様なニーズを持つ子どもと家庭に対して、質の高い保育を展開していくためには、子どもと保護者の関係性を含む、個々の支援ニーズを理解するとともに、保育士や保育園経営への支援、地域及び社会の理解促進と協働の重要性が示された。本研究で得られた、当事者のなまの声を今後の研究および専門職支援活動に活かし、保育の質向上とコミュニティ・エンパワメント実現に貢献することが期待される。

P1-059

4か月までの乳児を持つ父親の自己効力感と関連する要因についての検討

関 美雪<sup>1</sup>、服部 真理子<sup>2</sup>、佐藤 玲子<sup>3</sup>、上原 美子<sup>4</sup>、  
伊草 綾香<sup>5</sup>

<sup>1</sup>埼玉県立大学 保健医療福祉学部 看護学科

<sup>2</sup>武蔵野大学 看護学部 看護学科

<sup>3</sup>埼玉県立大学 保健医療福祉学部 健康開発学科

<sup>4</sup>埼玉県立大学 保健医療福祉学部 共通教育科

<sup>5</sup>埼玉県立大学大学院 保健医療福祉学研究科 博士前期課程

【はじめに】

自己効力感とは、育児という課題遂行にとって重要な要因の1つと考えられている。核家族で育児をする家庭が増加し、父親の自己効力感を高める支援も重要と考える。

【目的】

4か月までの乳児を持つ父親の自己効力感と、それに関連する要因として家族構成等の属性とを検討し、関連する要因を明らかにすることを目的とする。

【方法】

A市の新生児訪問および乳児家庭全戸訪問事業の対象となった児の父親700名を対象に、無記名自記式質問紙調査を配布し郵送にて回収した。調査内容は属性に関する項目と一般性自己効力感（以下GSES）16項目について回答を得た。研究の実施にあたり、所属大学の倫理委員会の承認を得るとともに、研究の目的について対象者に書面にて同意を得た。

【結果】

回収された192通（回収率27.4%）のうち、記載漏れのない188通を分析対象とした。対象者の平均年齢は34.0±5.7歳であった。核家族182名(96.8%)、育児休業の取得あり21名(11.2%)であった。GSESの5段階区分では、「低い」が16名(8.5%)、「やや低い」が58名(30.9%)、「普通」が50名(26.6%)、「やや高い」が59名(31.4%)、「高い」が5名(2.7%)であった。GSES得点と属性に関する項目とのt検定を行った。GSES得点は、「職場の上司や同僚に子どもの話ができる群」(n=174)は9.8±3.5(p<0.01)、「子どものことを気軽に話せる人がいる群」(n=176)は9.7±3.6(p<0.05)、「子育てに困難を感じていない群」(n=147)は10.0±3.3で(p<0.05)、「パートナーの話をよく聞く群」(n=132)は10.0±3.5で(p<0.05)でGSES得点が高かった。一方、家族構成や独居経験、育児教育参加の有無、育児休業の取得の有無などには有意差はみられなかった。

【考察】

母親を対象とした、自己効力感に関連する要因の検討において、ソーシャルサポートの有無との間に関連が見られていたが、父親においても、子どものことを気軽に話せる人や環境が重要であることが確認できた。父親においても、周囲からのサポートが子育ての自信につながると考えられた。